



教皇様の聲

1

249号

Libreria Editrice Vaticana, Citta del Vaticanoの転載許可済 2001

神の母マリアへの信心を新たに

〔国際マリア会議でのお話。〕

1 「一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせた。」（マルコ9・36）イエスは、弟子たちにひとつ警告した後、子供を皆の真ん中に立たせたのでした。イエスが弟子たちにした警告とは、最高の権力ではなく仕えることを望むようにというものです。この教えを聞いて十二人はひどくこたえたに違いありません。というも「だれがいちばん偉いかと議論し合っていたから」です。（マルコ9・34）優しく巧みに要求の厳しい教えを示す必要をイエスを感じたとも言えます。その当時、子供の価値は重要視されていませんでしたが、イエスは子供を抱き、いわばその子供とご自分を同一視されたのです。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」（マルコ9・37）

この聖体祭儀で、第二十回国際マリア会議とマリア聖堂の大聖年は幕を閉じますが、黙想のテーマとして、このまれに見る福音の描写を考えたいと思います。そこから私たちは倫理的な教えより先に、キリスト論的な、間接的にはマリア論的な教えを思い出します。

キリストは子供を抱いて、まず初めに表わしたのはご自分の思いやりの心です。キリストの心は生き生きとした感受性と愛情そのものです。キリストの心にはまず御父の優しさがありません。御父は永遠から聖霊において御子をお愛しになり、イエスの人としての顔にご自分の喜びである「愛する子」をご覧になります。（マルコ1・11、9・7参照）それから、女性らしい母の優しさがありません。イエスがナザレの家で過ごされた長い間、マリアはこの優しさでイエスを包み込んでおられました。キリスト教伝承は、特に中世の頃、幼な子イエスを抱くおとめをしばしば黙想しました。例えば、（・・・）次の文章は、マリアに愛情を込めて話しかけ、三日後に神殿で発見した御子を抱くよう招くものです。（ルカ2・40～50参照）「ああ、甘美なお方、あなたがお愛しになる御子を抱きしめ、その首に腕を回し、抱いて接吻してください。そして大いに喜んでイエスの三日間の不在を埋め合わせてください。」（「12才のイエス」8:SCh 60,p.64）

マリアの謙遜は神を引き寄せる

2 「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」（マルコ9・35）子供を抱くイエスの姿によってこの原則が力強く伝えられます。この原則の完璧な模範が、イエスの人性に、そしてマリアの中にも見い出されます。

誰もイエスのように自分が「初めの者」であるとは言えません。実にイエスこそ、「初めであり、終わり」「アルファでありオメガ」（黙示録22・13参照）、神の栄光の反映です。（ヘブライ1・3参照）復活によって、イエスは「あらゆる名にまさる名」（フィリピ2・9）を与えられました。しかしながら、受難においては、ご自分を「最後の者」としてお示しになり、「すべての人に仕える者」として、ためらわず弟子の足をお洗いになりました。（ヨハネ13・14参照）

ご自分を低くされるキリストとマリアは何とよく似ていたことでしょうか。マリアには神の母になるという使命があり、全被造物の上に立つという特別な恩恵も与えられましたが、聖母は何よりもまず、「主のはしため」（ルカ1・38；48）であることをお感じになり、完全にご自分を捧げて、神の御子にお仕えになりました。人々に仕えることを喜び、ご自分を兄弟たちの「はしため」ともなさいました。エリザベト訪問からカナの婚宴までのエピソードがはっきりとこのことを示しています。

3 このことが示しているのは、福音書の中でイエスが表明した行動の指針がマリアの偉大さをも照らし出しているということです。マリアの「卓越性」は、その「謙遜」に根付いたものです。この謙遜を通して神がマリアのもとにおいでになったことは明らかで、マリアには神の恩恵が満ちあふれていました。神はマリアを「恵みに満ちた」おとめ（ルカ1・28）となさいました。マリアは賛歌の中で告白します。「身分の低い、主のこのはしためにも目を留めてくださった... 力ある方が、わたしに偉大なことをなさいました」（ルカ1・48～49）

閉会したばかりのマリア会議で、皆さんはマリアに行なわれた「偉大なこと」を見つめ、偉大なことの最も奥深い要素である、マリアと三位一体との特別な関係について考えました。マリアは神の御独り子の母ですから、マリアが御父と聖霊とも非常に独特の関係にあったとしてもそれは当然なことです。

このような関係にあったとはいえ、マリアが人間としての努力をしなくてもよかったというわけではありません。マリアは、当時の慎ましい家族の日々の現実を完全に生きました。マリアは貧しさ、悲しみ、逃走、追放、無理解を経験したのです。ですから、マリアは霊的に偉大であっても、「遠い」存在ではありません。マリアは私たちと同じ道を歩み、「信仰の巡礼」（「教会憲章」58）に一致してください。しかしこの内的旅路で、マリアは神のご計画において絶対的な信仰を育みます。マリアを「謙遜でいかなる被造物よりも高貴な者」（ダンテ、Par XXXIII,2）とする偉大さもまた、明らかにその忠実さに根を下ろしています。

マリアの母性は特別な聖性をもたらす

私たちには、マリアが御父の第一の「愛すべき娘」（「教会憲章」53）として映ります。私たちが神から「イエス・キリストによって神の子」となるよう（エフェソ1・5参照）、また「御子における神の子」となるよう召されているのなら、マリアは当然こう呼ばれるべきお方です。マリアは人間でありながら、父なる神がイエスについておおせになった言葉をそのまま繰返す特権を与えられています。「あなたはわたしの愛する子」（ルカ3・22、2・48参照）マリアは母としての役目ゆえに特別な聖性を与えられ、神はその聖性に御目をお留めになります。

マリアは三位一体の第二のペルソナ、肉（人）となったみことばと特別な関係にあります。それは、マリアが直接的に託身（受肉）の秘義に関わっているからです。マリアはイエスの母であり、イエスはマリアを母として尊敬し愛しています。同時に、マリアはイエスを神であり主であると認め、細やかで忠実な心をもって自らを弟子とし（ルカ2・19、51参照）、あがないの業においては御子の寛大な協力者としての役目を果たしました。人となったみことばとマリアによって、創造主と被造物との間を隔てる無限の淵は埋められ、両者はこの上なく親密なものとなりました。お二人は聖なるものであり、神と人間の本質が神秘的に結びつく場です。そこでは最初に三位一体が示され、そしてマリアは新しい人間となり、その人間性は従順な愛によって再び契約の対話を始めます。

4 ところで、マリアと聖霊との関係についてどんな

ことが言えるでしょうか。マリアは最も純粋な「聖櫃」であり、そこでは聖霊がお住まいになっています。キリスト教では伝統的にマリアの中に次のような模範を認めています。聖霊の内的な働きかけに対し従順に応えたこと、聖霊の賜物を完全に受け入れたことです。聖霊はマリアの信仰を支え、希望を強め、マリアの愛の炎を再び燃え立たせます。聖霊はマリアの処女性に実りを与え、喜びの賛美を歌わせました。聖霊は、みことばに関するマリアの黙想に光を与え、徐々に御子の使命について理解させて行きました。カルワリオでのマリアの悲しみを支え、高間で祈りに満ちた期待の中でマリアを備えさせ、聖霊降臨の賜物を完全に受けられるようになされたのも、やはり聖霊でした。

御子の大聖年は御母の大聖年でもある

5 兄弟姉妹の皆さん、この栄光の神秘を前にしてはっきりわかることは、二つの催し、「国際マリア会議」と「マリア聖堂の世界大聖年」がいかに大聖年にふさわしいものであるかということです。この二つの催しはご聖体の祝いによって閉幕します。私たちはキリスト生誕二千年を祝っているではありませんか。それなら御子の大聖年は当然、御母の大聖年でもあります。

ですから、この恵みの年の実りとして望まれることは、キリストへの愛を強めると同様に、マリア信心を新たにすることです。マリアを深く愛し尊敬すべきであり、しかも心からの深い愛情を持たなければなりません。

マリア信心は聖書と聖伝にしっかりと基づいたものでなければなりません。まず第一に典礼を最大限に活かし、大衆信心を自発的に表わすために典礼からマリア信心の確かな方向づけを引き出すことです。

マリア信心とは、一人ひとりが完全に、聖なる方を全面的に真似ることです。

マリア信心は、迷信や意味もなくむやみに信じることであってはなりません。マリア信心は、正しい方法で、教会の識別を受け入れ、おとめマリアが神の民の善のためにご自分をお与えになることを何度も望まれた特別な表明を受け入れることです。

マリア信心は、いつでもマリアの偉大さをその源つまり神に戻せるものでなければなりません。マリア信心は、御父と御子、聖霊に対する賞賛の絶え間ない賛歌につながるべきです。

6 兄弟姉妹の皆さん、「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」と、イエスはお話しになりました。イエスはさらにこうおっしゃるかもしれません。「わたしの母を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」子としての愛情をもって受け入れる私たちに、

聖母はカナの婚宴でなさったように、御子を指し示します。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」(ヨハネ2・5)

皆さん、このマリアの言葉が、今日の大聖年の合言葉になりますように。今日の祝いはキリストと最

も聖なる御母を一つの賞賛で結び付けるものです。皆さん一人一人が、あふれんばかりの霊的な実りを受け、心から生活を新たにすよう励まされますように。マリアを通してイエスへ。アーメン。(2000.9.24)



障害を持つ人々が証しすること

〔障害を持つ人々に向けられたお話。〕

1 「身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」(ルカ21・28)

福音書のこの箇所、聖ルカは世の終わりの前に人々を恐れさせるものを強調します。しかし、ルカがさらに強く示すことは、反対にキリスト者が心待ちにする喜びの期待です。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗ってくるのを、人々は見る。」(ルカ21・27)これは信じる人々の心に希望をもたらすメッセージです。主が「大いなる力と栄光を帯びて」来られるのです。だからこそ、恐れるのではなく、身を起こして頭を上げるようにと弟子たちにお頼みになります。「あなたがたの解放の時が近いからだ。」(ルカ21・28) (…)

主の再臨の準備

心から皆さんにあいさついたします。皆さんは困難を抱えながらも、信仰と兄弟としてのこの出会いのためにローマへ来ることを望まれました。皆さんの代表者とカリタス・イタリアの責任者の方々に、今日のミサの初めにあいさつして下さったことのお礼を申し上げます。障害を持つ皆さん、家族やボランティアの方々にも心からあいさつ申し上げます。皆さんは、それぞれの教会で同じ日に司牧者と共に大聖年を祝っています。

兄弟姉妹の皆さん、皆さんはその体と生活の中で救いに対する強い望みを示しています。皆さんの希望の中に、救いへの強い期待がないということがあるのでしょうか。救いはキリストがその死と復活によって私たちのために勝ち得て下さったものです。肉体的精神的に困難を抱える人々は、確かにキリスト再臨の時に起こるような生活を送りながら、「救い」を待っています。「救い」が人々に完全に示されるのは、世の終わりのときです。信仰がなかったら、世の終わりを待つことには絶望と落胆が入り混じることでしょう。逆にキリストの言葉に支えられるなら、それは生き生きとした積極的な希望となります。

2 「あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」(ルカ21・36)福音書のこの部分は、「キリストの再臨」を示しています。つまり、キリストの栄光に包まれた再臨は、簡単に言うなら、「世の終わり」と呼ばれるものと同時に起こるのです。この神秘的な出来事は、啓示の言葉の中では大抵、はかりしれないほどの大変動として現われています。個人的な最後、つまり死と同じように、宇宙の終わりは、「死後の命」についての不安に満ちた問題と共に、知られざる苦しみへの恐れに対して苦悩を引き起こします。

(….)ところで私たちはどのように主の到来を準備すればよいのでしょうか。今日のこの貴重な催しは、主と出会うための具体的な準備が次のようなことであると強調します。つまり、(….)困難を抱える人々の近くに行き、分かち合うことによって準備するのです。兄弟の中にキリストを見い出すことによって、キリスト再臨の時にキリストに認めていただくための準備ができるのです。これが、キリスト教共同体が行なうキリスト再臨の準備の仕方です。キリストご自身がいたわる困難な状況にいる人々に焦点を当て、社会から除外されたり無視されたりする人に心を向けることによって、キリストと出会うための準備ができるのです。

3 今日私たちが行なってきたことは、キリストとの出会いの準備です。私たちは、大聖年の栄光と喜びを障害を持つ皆さんとその家族の方々と共に味わうためにこの大聖堂に集まってきました。ここに集まることで示したかったのは、皆さんの心配事、期待、賜物や問題を自分のものにするつもりがあるということです。

キリストの名において教会は献身し、もっと皆さんを「迎え入れる家」となるように努力します。障害を持つ方は、唯一で一度限りの人格をすべての人に共通の侵すことのできない尊厳の中に備えていま

す。ですから障害を持つ方々は、介護だけでなく何よりもまず愛を必要とします。愛は、理解、尊敬、結びつきとして現われるものです。それは誕生から思春期を通して成人となり、難しい時期、つまり多くの親が不安と共に直面する自らの死によって、子供たちと別れる時まで、愛が示される必要があります。皆さん、私たちが望んでいることは、皆さんの努力と避けられない落胆の時を共有し、皆さんの努力や落胆する時を信仰の光と、一致と愛への希望で照らすことです。

社会がすべきこと

4 兄弟姉妹の皆さん、皆さんがここにいらっしゃることで次のことが再確認させられます。障害は困難な状態というだけでなく、激励と懇願を示しているということです。当然、障害には助けが必要ですが、それよりも皆さんの存在は、個人的集団的な利己心への挑戦です。それは新しい兄弟愛への招きです。皆さんの状態は、生活に対する次のような考え方、つまり満足感や外見、スピードや能率だけに関心を示す考え方に疑問を投げかけます。

教会共同体も尊敬をもって耳を傾け、また皆さんの生活に起こるたくさんの方々の苦しみについて考える必要性を感じています。皆さんの生活は、その障害が先天的後天的なものに関わらず、理解しがたい苦しみがつきもので、傷つけられる出来事によって困難も多くあります。教会は皆さんや家族の方々の近くにいたいと思っています。配慮の不足から痛みや孤独感が増すことがある一方で愛情と寛大さの中で信仰が示されることによって、強さと生きる意味が与えられることを知っているからです。

この神聖な場で、様々なレベルで政治的な権威を持つ方々にお頼みしたいことがあります。ここに集まっている兄弟姉妹の皆さんの尊厳が効果的に認められ保護されるよう、生活状況や機会を確保するために努力してください。科学技術の知識が充実している社会では、人々が共存するためにもっとたくさんの方ができるはずですが、それは、障害を防ぐ生物医学的研究から、治療、援助、リハビリそして新たな社会復帰に及びます。

皆さんの一般市民としての権利や社会的霊的権利が守られるべきならば、人との関係、つまり援助、友情、分かち合いの関係を保護することはより一層

重要なことです。だからこそ、人間の人格を完全に視野に入れて、治療やリハビリを奨励することが必要なのです。

5 「どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように。」（1テサロニケ3・12）

今日聖パウロは、主と出会うために最も適切な道として愛の道を示してくれます。パウロが強調することは、私たちは誠実さと無償の愛によってのみ、「主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られる」（1テサロニケ3・13）ことに対して、準備ができていると自覚することができるということです。愛はやはり今日もいつでも決定的な基準なのです。

イエスは人間を救うために十字架の上にご自分をお捧げになったことで、救いの判決を下し、御父のあわれみ深いご計画をお示しになりました。イエスはご自分を「兄弟の中で最も小さい者」とすることによって、この救いを現代にお与えになります。そしてご自分を迎え入れ、愛をもって仕えるようお頼みになります。世の終わりの日イエスは「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、…」（マタイ25・35）とおっしゃるでしょう。そして私たちが愛と命の福音を宣べ伝え、生き、証したかどうかお尋ねになるでしょう。

6 生命と希望の主よ、あなたのみわざは今日の私たちにとって、なんと説得力のあるものでしょうか。人間の限界はことごとく買い取られあがなわれま。主によって障害は人生の決定的な言葉ではなく、愛が決定的な言葉となります。生きることの意味を教えてくれるのはあなたの愛なのです。

私たちの心が主に向かうようお助けください。つらいこと困難、苦しみに私たちが疲れていても、主の輝く顔が一人一人の中で見い出されますように。

「神の栄光はこの世で完全に生きる人」（リヨンのイレネオ、「異端論駁」4、20、7）という意味を理解できますように。そしていつの日か、完全な命を取り戻してくださった私たちの母マリアと共に神の光景をまのあたりにすることができますように。アーメン。

(2000.12.3)

「**教皇様の聲**」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
 ■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）
 詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人**精道教育促進協会** 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
 FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・火曜日午前9：30～11：30、水曜日午後1：30～午後5：00

木曜日午前9：30～12：00、午後1：30～5：00となっています。